

# 土器づくりのムラへの招待

—上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群の発掘調査—



豊科町郷土博物館

# ようこそ、土器づくりのムラへ

松本盆地の北東縁、今はゴルフ場のグリーンが映える豊科町東山も、今から10数年前までは木々がうっそうとしげる丘陵地でした。この丘陵地は西側こそ比高250mに及ぶ断層崖を形成していますが、東側は比較的穏やかで深い谷が発達しています。また、随所に風化した粘土層が露出し、湧水も豊富でした。

ここに須恵器という古代の土器を焼いた窯跡が発見されたのは昭和52年(1977)。林道開設の際に、炭の混じった真っ黒な土の中から無数のかけらが出てきたことによります。その後、多くの人々の分布調査によって、県内有数の須恵器生産地であることがわかつきました。窯を築くに適当な斜面、良質の粘土や燃料となる薪の存在、そして消費地である松本平に近いこと。この丘陵は「土器づくりのムラ」として絶好の場所だったに違いありません。

そのムラ（上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群）の姿が、昭和62年（1987）、ゴルフ場造成に先立ち行われた発掘調査によって明らかになりました。本書ではその成果をわかりやすく紹介し、さらに、この東山の「土器づくりのムラ」が古代信濃国においてどのような位置をしめていたか考察してみました。本書により郷土の昔を垣間見ていただき、そして、将来の豊科町を創造するヒントを得ていただければ幸いです。

さあ、これから皆さんを古代の東山にご案内いたします。耳を澄ませば、土器づくりのムラの人々の息吹が聞こえますよ。

1999年7月

豊科町郷土博物館

## 目 次

### 東山の発掘調査

上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群	1
土器づくりのムラを掘る	2
須恵器の窯跡	4
土師器・黒色土器の焼成	5
山中に広がる集落	6
さまざまな器	7
土器づくりのムラと古代の信濃	
東山の土器づくりのムラ	9
松本平の須恵器生産	11
信濃の須恵器生産	12
土師器窯と焼成坑の地域性	14
凸付四耳壺の広がり	15
土器づくりのムラ、その後	
生産の終焉	16

## 例 言

\* 本書は豊科町郷土博物館開館20周年特別展「土器づくりのムラ—豊科町東山の窯跡群と古代の信濃—」(1999年7月24日～9月26日)にあわせ、上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群の発掘成果を一般にわかりやすく紹介するために作成した。調査の詳細については、同年刊行の、発掘調査報告書を参照願いたい。

\* 本書の編集は、豊科町東山遺跡調査会の協力を得て、豊科町郷土博物館が行った。

# 東山の発掘調査

## 上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群

**遺跡の立地** 窯跡が分布する豊科町 東山は、松本盆地の北東縁、北流する犀川の東に連なる山地の一角に位置しています。この山地は松本市芥子屋主山（標高891.5m）を中心とし、西側（豊科町側）こそ標高差250mに及ぶ急な崖が続いていますが、南東側（松本市側）は比較的緩やかで深い谷が発達し、山上には平坦地も多く見られます。また、ところどころに風化した粘土層が露出し、湧水も豊富でした。

こうした地形・地質の条件が窯を築くのに適していたのでしょうか。松本市岡田から東筑摩郡四賀村にかけて窯跡群がいくつも発見されており、中でも豊科町東山の上ノ山窯跡群と菖蒲平窯跡群は中核的位置を占めています。

**遺跡の発見** 東山の窯跡群の調査・研究は1950年代から開始されました。『東筑摩郡・松本市・塙尻市誌』（1973年）には、菖蒲平窯跡群について、「現在3基が発見され、付近に遺物が散乱している」と記されています。また、1977年には林道工事中に上ノ山窯跡群が発見され、2基の窯跡の発掘調査が行われました。引き続き、この調査に参加した豊科高校地歴クラブの生徒により分布調査が行われ、遺跡の広がりが明らかになってきました。

**発掘調査の実施** 1987年、東山にゴルフ場が造成されることになり、工事に先立ち、豊科町東山遺跡調査会によって発掘調査が行われました。

5月から11月の短期間に、全国から集まつた大学生らが参

加して、集中的に発掘するという例のない大規模な調査となりました。

調査は遺跡のまとまりと地形から、上ノ山窯跡群を18、菖蒲平窯跡群を12の地区に分けて実施しました。その結果、今から約1200年前（8世紀から9世紀代）の須恵器の窯跡が17基、陶工たちが住んでいた住居（工房）跡が26軒発見されました。さらに粘土を貯蔵した穴、土師器や黒色土器という土器の焼成坑（穴）なども発見されました。一窯跡群内でこれだけ多くの須恵器窯跡が発掘されたこと、しかも住居跡や粘土貯蔵穴などの施設、土師器・黒色土器などの焼成坑も一緒に発見されたことは長野県において例がなく、生産の一連の体系、さらにその展開を知ることのできる貴重な発見となりました。

なお、上ノ山窯跡群の一部と菖蒲平窯跡群の多くはゴルフ場のコース内に現状保存されています。



▲ 上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群遠景

北東上空より。松本平を一望できるこの丘陵の谷あいからは無数の煙が立ち上っていたことだろう。

## 土器づくりのムラを掘る



▲ 上ノ山01地区遠景

下方は調査中の上ノ山02地区。窯跡は斜面の尾根近くや掘の適当な傾斜地を選んで築かれています。



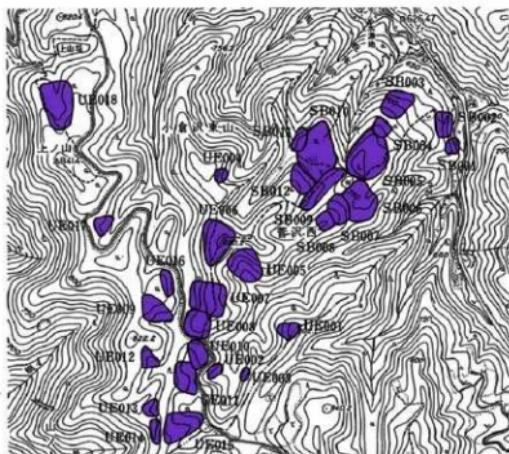
▲ 調査中の上ノ山05地区

調査地はうっそうと樹木が茂った中にあります。斜面の発掘は、まず、伐採した樹木の片づけや草刈りなど清掃から始まります。



▲ 調査中の上ノ山07地区

真夏の炎天下、急傾斜地での作業は、平地の発掘では味わえないほどの、大変なものでした。



▲ 上ノ山窯跡群・菖蒲平

窯跡群地区区分

UE：上ノ山窯跡群

SB：菖蒲平窯跡群



#### ▲ 調査中の上ノ山15地区

この斜面では6基もの須恵器の窯跡が見つかりました。窯跡の下方には窯から撒き出され捨てられた炭や失敗品が厚く堆積しています。土よりも土器のほうが多いくらいで、まさに宝の山です。



#### ▲ 竪穴建物の発掘（上ノ山18地区）

山中の平坦地や緩傾斜地からは多くの建物が見つかりました。いずれも、地面を掘り窪めてつくられた竪穴建物で、陶工たちの住居や工房跡と考えられます。



#### ▲ 蒲蒲平窯跡群（蒲蒲平10地区）全景

この地区では、竪穴建物1棟と多くの土坑が見つかりました。窯はこの平らの周囲の斜面に築かれてあります。



#### ▲ 上ノ山02地区的窯跡

天井は崩れ落ちて残っていません。崩れ落ちた天井部や流れ込んだ土を除くと、取り残された坏類がいくつも重なって出てきました。急斜面上でも製品が置きやすいように、粘土で台を作ったり、須恵器のかけらを置いて平らな面を作り出すなど工夫されています。

#### ◇ 土器のいろいろ

**須恵器** 窯窓（穴窓）を用いて高温で焼かれた青灰色で硬質の焼き物。その技術は古墳時代に朝鮮半島から伝わったもので、初めに畿内を中心とする地域で焼かれ、その後各地に伝播した。豊科町東山もその一大産地。

**土師器** 前代からの焼き物である弥生土器の系譜をひく褐色の素焼き土器。火に強いので煮炊きの臺として多く使用された。

**黒色土器** 土師器の坏・碗などの内面を磨き、炭素を吸着して質感を高めた土器。

**灰釉陶器** 須恵器に灰の釉薬をかけたもの。今でも焼き物の産地である瀬戸美濃地方で盛んに焼かれたもので、9世紀後半以降、信濃にも多くもたらされた。

## 須恵器の窯跡

**窯跡の分布** 上ノ山窯跡群で17基の須恵器窯跡を発掘しました。窯跡は小倉沢あるいは吉沢から東西に入り込む小さな谷の南向き斜面にまとまって分布しており、中でも上ノ山15地区では6基が並んで発見されています。

**窯の構造** 窯跡は斜面に細長い穴を掘って、わらなどスサを刻み込んだ粘土で天井を架けたもので、ちょうどトンネルのような構造をしています。燃料を燃やす焚口から奥の煙だしまで、長さ4~8m前後、幅1.2mほどの大ささで、製品を焼きあげる焼成部の床は30~40度の急傾斜をなしていました。窯の壁は鮮やかな紅色で、所によつては釉がガラス状に青黒くふきだしています。焚口の手前の斜面は灰原といって窯から撒き出され捨てられた炭や灰、焼き損じの須恵器が厚く堆積しています。

東山の窯跡の特徴としては、小振りのものが多いこと、いずれも焼成部の床面が急傾斜であることなどがあげられます。また、窯は8世紀前半から9世紀代にかけて次第に小さくなしていくことも確かめられました。



▲ 窯壁に残る指痕

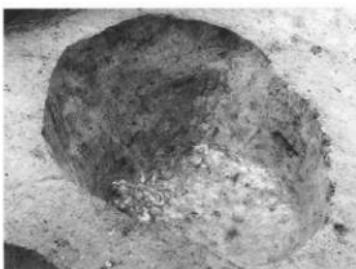
(上ノ山15地区4号窯)

窯壁には指でナデつけた痕や布の痕が観察できるものもあります。また、粘土の貼り重ねから何度も補修されたことがわかる例もあります。



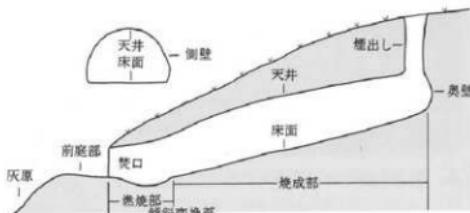
▲ 上ノ山14地区の須恵器窯

2基が並ぶ。上ノ山窯跡群では最古の窯で、8世紀前半のもの。



▲ 上ノ山10地区の粘土貯蔵穴

土器づくりは、十分に吟味した粘土を選んで採掘することから始まります。東山では採掘坑（粘土を探った穴）の発見はありませんでしたが、窯跡近くの谷などで採掘したものと考えられます。このような土坑（貯蔵穴）でねかして粘性を高めてから利用したのでしょうか。



▲ 須恵器窯の構造

## ■ 土師器・黒色土器の焼成

土師器・黒色土器などを焼きあげた穴（焼成坑）は、須恵器窯のように大がかりでなく、地面を掘り溝めた簡単な構造をしています。尾根や平坦地に広く分布しており、規模は長径1.0～1.8m、短径0.8～1.5mで、平面形は長方形のもの、正方形のもの、円形のものがありました。多くは長方形のもので、底面と壁のうち三方が良く焼けています。その度合いから何度も焼成が繰り返されたことが考えられます。壁のうち、手前の方は残りがよくありません。灰の搔き出しに用いられたのでしょうか。

上ノ山10地区に発見された3号土坑は、長径1.7m、短径1.4mの平面長方形の土坑です。



▲ 上ノ山10地区 3号土坑

この穴には多量の土器が詰まっていました。写真は土器のほとんどを取り上げてからのもの。

壁、特にその上面が著しく焼けており、床面には焼土・炭化物が面となって広がっていました。炭化物の上面からは剥離・ひび割れ・歪みのある同一器形の壊が30個体以上出土しており、床面に燃料となる薪と土器を置き、その上に枯れ草や灰などを被せて焼きあげたものと考えられました。

同じような焼けた土坑は、上ノ山06地区・上ノ山11地区などでも発見されています。特に上ノ山11地区には、土師器・黒色土器などの破片と焼土・炭が斜面に厚く堆積しており、上方にある焼けた土坑で土器生産が行われていたことを示しています。



▲ 上ノ山11地区的焼成坑

左は竪穴建物。焼成坑と建物は近くに発見されることが多い。



▲ 窯場の景観（イラスト：小原稔） 上ノ山15地区から上ノ山14地区を望む。

## 山中に広がる集落

### 竪穴建物の分布

上ノ山窯跡群で25軒、菖蒲平窯跡群で1軒の竪穴建物を発掘しました。これらは上ノ山08地区、上ノ山09地区、上ノ山11地区、上ノ山15地区など窯跡近くの緩斜面の尾根付近と、上ノ山06地区、上ノ山18地区など平坦地にまとめて分布しています。また、この他にも菖蒲平窯跡群内（菖蒲平05地区・10地区など）に多数存在することが確認されています。規模は一辺4m前後と小型ですが、石を組んで芯にしたカマドを備え、松本平の集落遺跡の住居跡と構造的には変わりありません。なかには粘土の塊やロクロの軸穴と考えられる穴の存在から、工房だったことがわかる例もあります。

出土遺物は、土師器・黒色土器が主体で、9世紀後半から10世紀初頭に位置づけることができます。須恵器生産というよりも土師器・黒色土器生産に伴って、これらの建物が出現してきたことがわかります。このことは、土器焼成坑と建物が近くに発見される例が多いことからも裏付けられます。

上ノ山06地区1号住居 小型の建物が多い中で、一辺6mと際だって規模が大きいのが上ノ山06地区に発見された1号住居です。窯跡群全体を見渡せる尾根上に単独で位置しており、土師器・須恵器・東濃（岐阜県）か

ら搬入された灰釉陶器、カマド構築材とした瓦、石製品、鉄器を多量に出土しています。鉄器には鉄鎌（鉄のやりじり）・紡錘車（糸を紡ぐ道具）・刀子（小刀）・鎌などが、石製品には権威を示す帶具である石鏁などがありました。粘土の塊も出土しており、土器生産に係わっていたことは明らかですが、それ以外にもいろいろな道具を持っていることから、さまざまな生産活動をしていたことがわかります。



▲ 上ノ山18地区の竪穴建物

上ノ山窯跡群北西端の平坦地に位置するこの地区からは、4軒の建物が並んで発見されました。



▲ 上ノ山06地区1号住居

正面の壁の中央には、瓦や石を芯にしたカマドが造り付けられています。



▲ 上ノ山06地区1号住居の埋壺

床の隅に埋められた壺。

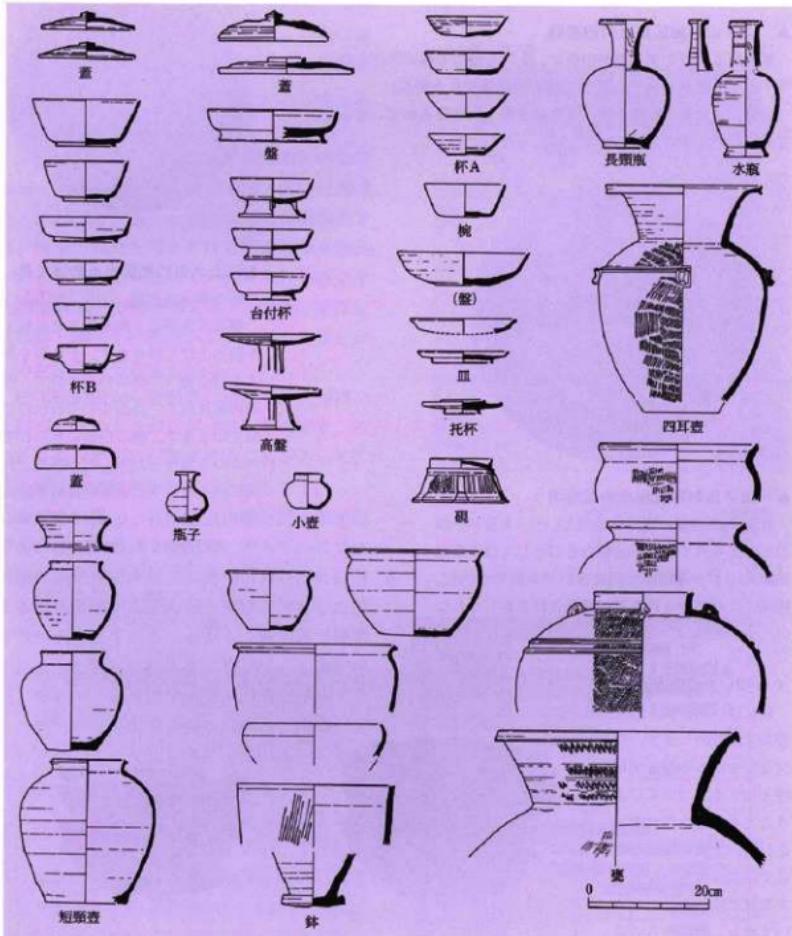
中には、トチの実がたくさん入っていました。

## さまざまな器

**生産された須恵器** 窯では食膳に供する壺やお椀・皿の類や、大小の甕・壺など人々の日常生活に欠かせないさまざまな土器が焼かれていきました。その量は整理用コンテナ1000箱に及びます。発掘調査で出土したものには灰原に捨てられた不良品がほとんどですが、実際はその何倍もの須恵器が焼かれてい

たことになります。

器形の種類は、各種の蓋・壺・椀・皿・盤・甕・甌など全部で20種類以上あります。これらは、さらに法量(大きさ)や技法などで細分できます。また、壺や瓦、製作に用いる道具の出土もありました。



▲ さまざまな器—上ノ山窯跡群で生産された主な須恵器の器形—



▲ 上ノ山01地区出土の円面鏡

墨を磨ぐ役目をする硯が中央に、墨汁を貯める海が周囲を取り巻くので円面鏡という。脚部に蓮の絵が描かれた優品。

当時、このような硯を使って文字を書く人は限られていきました。官衛（役所）やお寺に納めるものだったのでしょう。



▲ 上ノ山05地区出土の瓦当范

軒丸瓦の文様の型で瓦当范という。木製が一般的と考えられており、土製のものとしては千葉県栗原町コジャ遺跡出土例に次いで全国で2例目。将来、これで作られた瓦が発見されるかもしれません。



▲ 上ノ山15地区出土の當具

柄の部分は欠損。

壺など大型の土器を作るには粘土を積み上げて作ります。その形を整える時に使うのがこの當具で、器の内面に當て、外面を羽子板状の道具で叩きます。壺の内面に見られるいくつも重なった同心円の模様。外面上に見られる平行あるいは格子状の模様はこの痕。ただし、木製のものや、丸石を使うことも多かったようです。

#### くつついた須恵器 ▶

窯には、効率よく器を重ねて窯詰めします。瓦ラなどを挟みますが、時としてくつついてしまふこともあります。左は無台の环を14段以上積み重ねたもので、右は有台の环と蓋を交互に積み重ねたものです。いずれも、窯跡ならではの出土品。



# 土器づくりのムラと古代の信濃

## 東山の土器づくりのムラ

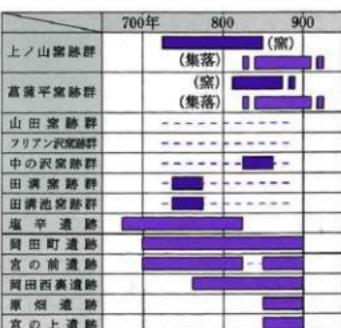
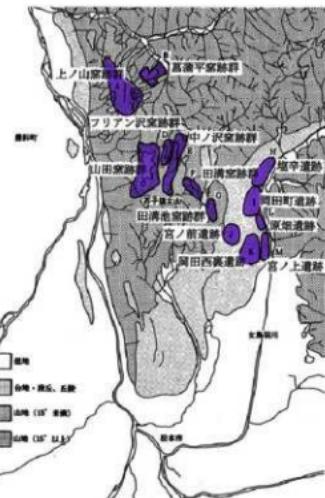
土器づくりのムラ 上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群の南に連なる山中には、田溝池窯跡群・田溝窯跡群・中の沢窯跡群・フリアン沢窯跡群・山田窯跡群とよばれる須恵器窯跡群が分布しています。発掘調査こそ数例しか行われていませんが、上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群同様に、奈良時代から平安時代にかけて、継続して須恵器生産が行われていたものとみられます。

また、近年行われた松本市岡田地区の塩辛遺跡・岡田町遺跡・宮の前遺跡・岡田西裏遺跡・原畠遺跡・宮の上遺跡などの発掘調査では、廃棄されたと考えられる須恵器不良製品がたくさん出土すること、貯えられた粘土や土器焼成坑が発見されることから、そこに窯跡群と関係した集落が広がっていることが明らかになってきました。

松本市岡田から豊科町にかけて、大規模な土器づくりのムラが広がっていましたのです。このムラを、中心に位置する山の名をとって、芥子望主山窯跡群と呼ぶことにします。

生産の展開 芥子望主山窯跡群で須恵器生産が始まるのは7世紀末になってからです。窯跡は未発見ですが、女鳥羽川の谷口に位置する塩辛遺跡から歪んだり窯壁が付着した須恵器が出土していることから、縁辺部で操業が始まったとみられます。やがて、8世紀中頃になると、田溝池窯跡群・田溝窯跡群・上ノ山窯跡群など山中の複数の地点に窯場が広がります。また集落も南の岡田町遺跡・宮の前遺跡へと拡大します。8世紀後半から9世纪にかけては、それぞれの窯跡群で生産が展開し、窯数が最も多くなります。9世紀後半には集落が女鳥羽川の低位段丘面に位置する原畠遺跡・宮の上遺跡から、山中の上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群内まで広く分布するようになります。また、上ノ山窯跡群・菖蒲平

窯跡群の他にも、岡田西裏遺跡・岡田町遺跡・宮の前遺跡・宮の上遺跡でも土器焼成坑や粘土が発見されており、集落範囲とともに土器・黒色土器の生産も広がっていましたことがわかります。



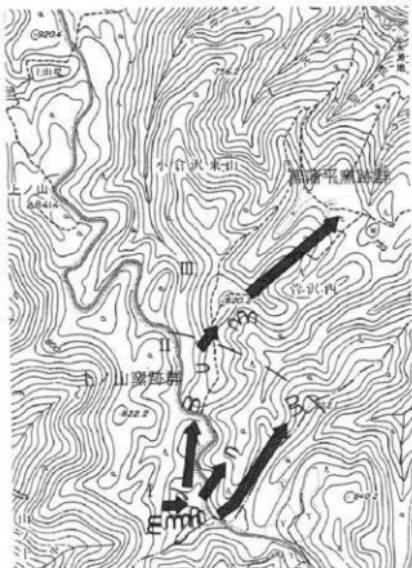
▲ 芥子望主山窯跡群の分布と消長

**上ノ山窯跡群の展開** 上ノ山窯跡群では8世紀前半に小倉沢最奥（松本市境）の上ノ山14地区において生産が始まります。また、中頃にかけて対面の上ノ山15地区の小さな谷にも入り口から奥に向かって窯が築かれます。8世紀後半から9世紀前半には上ノ山15地区から上ノ山02・01地区へ、さらに上ノ山08・07地区と北方に拡散・移動します。9世紀中頃から後半にはさらに北へ移動し、上ノ山05地区や菖蒲平窯跡群内に窯が築かれます。個々の窯は煙突・灰原とも規模が小さくなりますが、操業数は最も多く、分布範囲も広くなります。一方、8世紀後半に始まった土師器・黒色土器の生産が拡大し、9世紀後半には広く焼成坑が分布するようになります。中でも厚い灰層が形成される上ノ山11地区が生産の中心となりました。

**多様な生産** 遺跡内に残る花粉化石を分析した結果、窯跡群が展開する時期に樹木花粉が減少し、それに伴ってソバの花粉が出現し始めることがわかりました。特に土坑（上

ノ山10地区粘土貯蔵穴）に置かれていた粘土からは、その花粉が多量に発見されました。ソバは焼畑の主力作物であり、森林（燃料材）の伐採によって開かれた地が焼畑などによつて畠地へ開発されていったこと、さらに土器生産とソバ栽培とが同時に行われていたことを知ることができます。

上ノ山窯跡群内の堅穴建物や山麓の集落からは鉄製の斧・鎌・紡錘車（糸を紡ぐ道具）・苧引鉄（からむしなどの草から繊維をとる道具）・薦石（むしろを織るときに使うおもりの石）・鎬（鍛冶に用いる送風装置）の羽口（送风口）・鉛など多様な道具類が出土しています。また、土器生産に併行もしくは後続すると考えられる炭窯も多く見つかっています。土器生産以外にもさまざまな生産・生業、すなわち山林資源の経営・山野用益活動が行われていたことがわかります。土器生産開始期の集落（塩辛遺跡）が女鳥羽川扇状地の一番上に位置するのも扇状地の開発＝水田経営を視野に入れていたからだと思われます。



▲ 上ノ山窯跡群の展開



▲ 上ノ山05地区 1号住居出土の道具類  
上：鎌・鉄鎌、下：紡錘車

## 松本平の須恵器生産

**松本平の須恵器生産** 古代の松本平は信濃国筑摩郡にあたります。この地域では芥子望主山窯跡群の他にも、7世紀代から8世紀中頃にかけて、松本市新切窯跡群・歓形沢窯跡群・塙尻市菖蒲沢窯跡など複数の須恵器生産地が出現します。この時期、古墳や集落では美濃須須窯跡群（岐阜県）の製品の出土が目立っており、須恵器に対する需要の高まりが開窯の契機になったと考えられます。実際、菖蒲沢窯の製品は美濃須須窯から陶工が移動したのではないかと言われるほど似ています。しかし、これらの窯はいずれも數基程度からなり、短期間・小規模な操業でした。それぞれの小地域を対象とした狭域供給の窯だったのです。

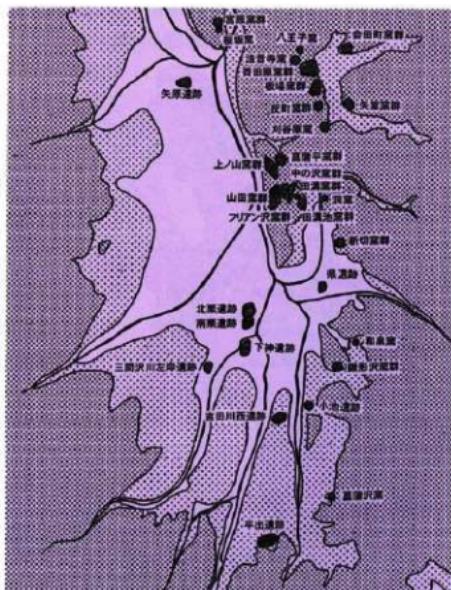
**生産地の集約化** 一方、芥子望主山窯跡群でもこの時期に複数の支群において生産が始まり、以後、急速に拡大して9世紀後半まで生産が継続されます。8世紀後半以降の窯が発見されているのは芥子望主山以北の山中に分布する窯跡群に限られており、須恵器生産がこの地域に集約されたと言えます。

上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群や山麓の岡田西裏遺跡・宮ノ前遺跡では土師器焼成坑がたくさん発見されています。筑摩郡で土師器焼成坑が発見されているのもこの地域に限られていること、また、集落遺跡出土の土師器の規格が揃ってくることから、土師器生産もこの芥子望主山窯跡群に集約されたと考えられます。上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群出土の瓦や須恵器壺には土師器壺の技法であるハケがほどこされた例があり、土師器と須恵器が一体的に生産されていたことを示しています。

こうして「筑摩郡に流通する土器は芥子望主山窯跡群で生産する」という体制ができあがりました。長野自動車道建設の事前発掘などで、松本平では古代の住

居跡が数千軒も発見されましたが、そこで使われた土器のほとんどが東山で焼かれていたのです。

**生産の背景** 都の土器様式に対応した多種多様な土器、さらに硯・瓦の出土、生産の背景にはそれらを指向し敷衍しようとした（広げようとした）有力者の存在がうかがえます。筑摩郡という範囲を供給範囲にしていることから、郡の役人が生産にかかわっていたと考えられます。さらに上田地方から平安時代の初めには松本平に移ってきたとされる信濃国府（今でいう長野県庁）とも関係があったことでしょう。上ノ山窯跡群で出土した瓦は国府の建物の屋根を葺くために、硯はそこで事務を執る人が使うために焼かれたものかもしれません。東山の土器づくりのムラは筑摩郡、さらには信濃国において重要な位置を占めていたのです。



▲ 松本平の窯跡群と古代の主要遺跡  
東山は筑摩郡の工業地帯でした。

## 信濃の須恵器生産

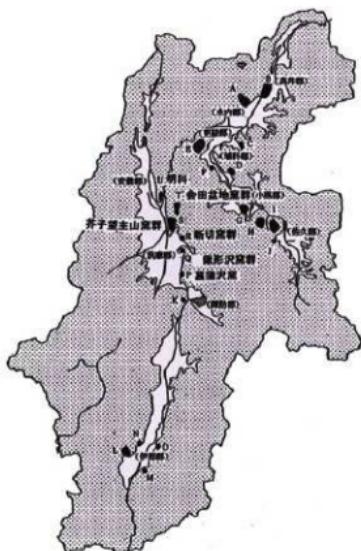
**須恵器の生産**　須恵器の生産には従来の土師器とは違った、全く新しい技術が必要でした。そのため、専門の陶工集団があって、生産にあたっていました。

須恵器が伝えられた当初は、畿内を中心とした地域で生産が行われます。大阪府南部、堺市近郊の陶邑はまさに「須恵器」のムラで最古最大の産地でした。その後、地方でも窯が築かれ、全国的に須恵器生産が展開していきます。古墳時代の須恵器は主に古墳への副葬品としての性格が強く、有力氏族の本拠地周辺に窯が築かれた例が多くみられます。その後、寺院の造立や地方官衙（役所）の整備などに伴って、全国各地に生産地が現れます。生産された須恵器はそれらに供給されたばかりでなく、一般集落にも広く流通するようになります。

須恵器窯の分布と生産の展開 信濃での  
須恵器生産は6世紀前半の長野市松ノ山窯跡  
(更級郡)に始まります。須恵器の特徴から、

当時国内の生産の中心地であった大阪府の陶邑から陶工が移動して開窯したと考えられています。その後、窯跡の発見がなく約1世纪の空白が存在しますが、7世纪の中頃から後半になって中野市兼田葉窯跡群(高井郡)、佐久市石炉窯跡(佐久郡)など各地に生産地が現れます。さらに、8世纪中頃からは磐田窯跡群(水内郡)、長丘町窯跡群(高井郡)、豊山町窯跡群(更級郡)、八原窑原跡群・御牧ヶ原窯跡群(佐久郡)、童丘窯跡群(伊那郡)、芥子望王山窯跡群・会田盆地窯跡群(筑摩郡)など、諏訪除く各郡で拠点的な窯跡群が成立し、生産を展開します。

このように、古墳時代の信濃は須恵器生産が盛んな地域とはいえませんでしたが、7世紀の後半からは一気に須恵器生産の盛んな地域の仲間入りをします。8世紀の後半には食器（椀・皿類）は、すべてといっていいほど、須恵器でまかなわれるようになります。



### ▲ 信濃の窯跡の分布と消長

都	600年	700	800	900
水内		A ■ 傘山		
离井	B □ 鹿野山	高丘山		
埴科		C ■ 松代	D ■ 田舎	
更級	E ■ 桐ノ山	鬼瀬山	F ■ 戸曾坂	
小原		G ■ 依田		
佐久	J 桧原(日向)		H ■ 八重原	I ■ 開牧ヶ原
深防	K ■ 鬼戸			
伊那		L ■ 電丘	M ■ 犀江	N ■ 金谷原
			O ■ 大矢沢	
筑摩	P ■ 高瀬川	Q ■ 鶴嶺川		
	R ■ 新切	□□	S ○○ 齐子原山	T ○○○ 金田赤地
安曇	U ■		V ■ 明利	

**窯構造の特徴** 信濃の窯跡で特徴的なのが焚口の壁に礫を用いる例です。多いのは平石をたてたものですが、中には礫を積み上げたものも認められます。塙尻市菖蒲沢窯跡(筑摩郡)にいたっては、壁全体に平石がたてられています。

焚口に一対の平石をたてる例は全国各地の窯に認められます。しかし、信濃ほど多くはなく、ましてや礫を積み上げる例はほとんど聞きません。

焚口に礫を積み上げる構造は中野市茶臼峯6号窯跡(高井郡)、佐久市右附7号窯跡(佐久郡)など既に7世紀代から認められます。しかし、同じ窯跡群でも有る窯と無い窯があり、今のところ、特定の地域や時期に偏るという傾向は見いだせません。それ自体は燃焼を良くするための工夫や、補強あるいは閉塞(窯を燃焼途中でふさいで、窯内を還元状態にすること=須恵器の焼成には不可欠)に係わるものと考えられます。しかし、岐阜県美濃須衛窯跡群の陶工が来て須恵器を製作した

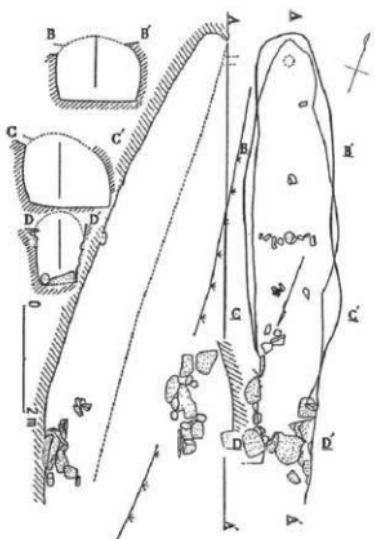
とされる塙尻市菖蒲沢窯跡など、他地域から技術導入したと考えられる窯跡でも認められることから、他に積極的に採用される理由があったのでしょうか。窯の系譜や陶工組織を考えるうえで重要な視点になりそうです。

なお、上ノ山窯跡群でも、焚口に礫を立てたと考えられる窯(上ノ山15地区1号窯など)が発見されています。



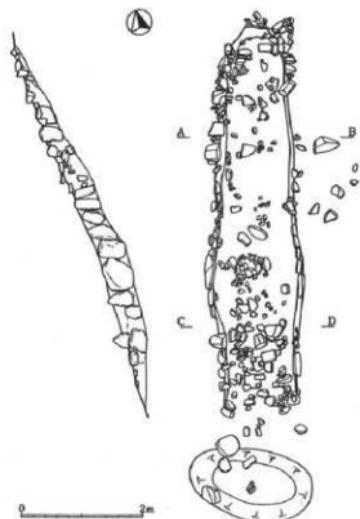
▲ 上ノ山15地区1号窯

壁に使われていたと思われる石が焚口に落ち込んでいます。



▲ 茶臼峯6号窯跡(中野市)

大川清・金井汲次 1964 「長野県中野市草間窯業遺跡」『信濃』第16巻第11号より



▲ 菖蒲沢窯跡(塙尻市)

塙尻市教育委員会 1991 『菖蒲沢窯跡』より

## 土師器甕と焼成坑の地域性

**焼成坑の形態** 土師器を焼いた「土師器焼成坑」の発見は須恵器窯ほど多くありません。上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群を除けば、長野県では松本市の宮の前遺跡・岡田西裏遺跡、中野市の栗林遺跡などで発見されているにすぎません。いずれも、須恵器窯跡群の一角に位置する遺跡です。

形態は、栗林遺跡が方形、上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群・宮の前遺跡・岡田西裏遺跡が長方形でした。山梨県の巨摩地方では円形の土師器焼成坑が発見されており、地域によって違いが認められます。

### 土師器に認められる地域性

一方、生産された土師器の形や製作技法にも違いが認められます。煮炊きをする道具である土師器甕でみてみましょう。

北信（長野市近辺）ではロクロ成型でケズリまたはタクキのほどこされた砲弾型の長甕とロクロ調整の小甕が、東信（佐久市近辺）では薄くヘラケズリしたいわゆる「武藏型」長甕と小甕が、中信（松本市近辺・南信（飯田市近辺）では平底で胴部外面にハケをほどこした長甕とロクロ調整の小甕がそれぞれ使われています。このことは、そ

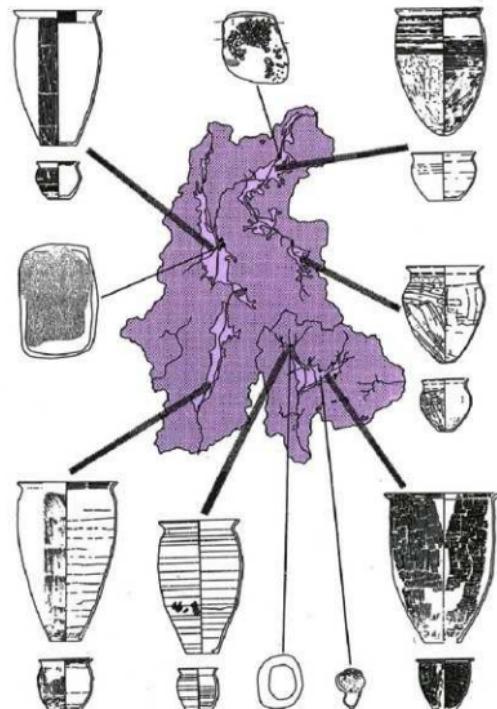


▲ 中信の土師器甕

豊科町吉野町遺跡出土

それぞれの地域に違う土師器を作る集団が存在していたことを示しています。図をみれば、焼成坑の形態の違いと土師器甕の違いが見事に一致していることがわかります。

**土師器の生産体制** 周辺地域の様相もあわせると、北信は北陸、東信は北武藏、中・南信は東海との強い関係がうかがえます。また、筑摩郡同様に、北信でも須恵器窯跡群内に土師器焼成坑がありました（栗林遺跡）。そこで生産された土師器にはタクキなど須恵器製作技法が採用されており、北信でも土師器と須恵器の一体的生産が行われていたことがわかります。



▲ 土師器甕と焼成坑の地域性

## 「凸帯付四耳壺」の広がり

**凸帯付四耳壺** 粘土で作る土器は思いのままの造形が可能です。古代にも、繩文土器ほど個性的ではありませんが、各地で特徴ある器形が焼かれていました。

信濃では「凸帯付四耳壺」がその代表です。広口の大型の壺(瓶)の肩部に凸帯を巡らし、それを4分割するように瘤状の小突起(耳)を付けたもので、県内各地の窯で焼かれ、集落跡からもごく普通に出土しています。しかし、県外からの出土例は少なく、信濃独自の器形と考えられています。

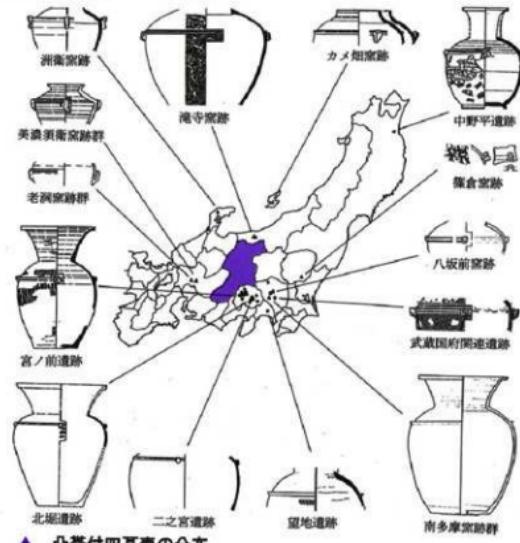
**凸帯付四耳壺の分布** ところが最近、信濃以外でも出土が報告されるようになってきました。甲斐(山梨県)では既に数十例に達し、越後の庵守窯跡(新潟県)、能登の洲衛窯跡(石川県)、南多摩窯跡(東京都)・八坂前窯跡・新久窯跡(埼玉県)、下野の篠倉窯跡(栃木県)等での出土により、それぞれの地域で生産されていたことも明らかになつてきました。また、遠く、陸奥の中野平遺跡(青森県)等でも出土が報告されています。

**器形の成立** そもそも凸帯に瘤状の耳が付く器形は、8世紀前半の岐阜県美濃須衛窯跡(老洞窯跡・稻田山窯跡)に認めることができます。8世紀前半の信濃には、美濃

須衛窯産の須恵器が多数もたらされていました。また、塩尻市菖蒲沢窯跡をはじめ、これらの地域から技術導入して成立したと考えられる窯もいくつかあります。美濃須衛窯の製品を祖形に、8世紀中頃から後半に、信濃独自の「凸帯付四耳壺」に発展していったものと考えてよいでしょう。

**分布の背景** 凸帯付四耳壺は8世紀後半から9世紀にかけて一気に信濃全域に広がります。急速な広がりの背景には「信濃」という国意識が強く働いていたと考えられ、国府の関与がうかがえます。さらに、東国への波及は前衛としての信濃の政治的位置が強く反映されているとみられます。

上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群でも8世紀後半以降、凸帯付四耳壺がたくさん生産されています。その時期は信濃国府が筑摩郡に移ったとされる時期と一致します。凸帯付四耳壺の広がりは、当時の政治権力と土器づくりのムラとの関わりを何かしら暗示しているようです。



▲ 凸帯付四耳壺

# 土器づくりのムラ、その後

## 生産の終焉

豊科町東山の土器づくりのムラは古代の筑摩郡、さらには信濃国において重要な位置を占めていました。今を遡ること千数百年前、この丘陵の谷あいからは土器を焼く煙が絶え間なく立ち上っていたことでしょう。そしてここで焼かれた土器は松本平一円に運ばれ、多くの人々の食卓に並べられたことでしょう。

しかし、この土器づくりのムラも、やがて終焉の時期を迎えることとなります。

**生産体制の小規模分散化** 芥子屋主山窯跡群では、9世紀前半まで、窯は山中に、拠点となる集落は山麓に置かれていました。しかし、9世紀中頃、土師器・黒色土器生産が盛んになるとともに、山麓から山中まで広く建物と焼成坑が出現します。両者は近くにあることが特徴で、須恵器窯の小型化ともあります。

建物の規模・遺物の内容が際だっていた上ノ山06地区1号住居は、まさにその小規模分散化を主導する有力者の住居だったと評価できます。

また、土器以外の多種多様な生産もこの時期に最も盛んになります。松本平西部では初

期在園の経営も活発化します。こうした有力者は、筑摩郡あるいは信濃国という公的な枠組みを巧みに利用しながらも、着実に私富の形成、私的な流通の拡大をはかっていったことでしょう。こうして、松本平のそこかしこで、しだいに中世の足音が聞こえてくるようになります。

**生産の終焉** 9世紀末には、消費地（集落跡）の食器は東海地方から多量に持ち運ばれた灰釉陶器と土師器が中心になり、須恵器は姿を消していきます。また、地元で生産された土師器もしだいに個体差が大きくなっていきます。こうして、須恵器・土師器・黒色土器など多種の土器を筑摩郡域に供給した一体的・一元的な生産体制は終焉を迎えることとなります。

以後、東山から土器を焼く煙が立ち上ることはありませんでした。やがて、荒れ地が拡大し、二次林としてのアカマツ林が形成されます（花粉分析結果より）。そして、中・近世には入会山として再び草木の伐採が行われることになります。発掘で見つかった炭窯の一部にはこの時期のものもあるかもしれません。



▲ 古代の景観（イラスト：小原稔） 豊科町吉野町遺跡から東山を望む

## 上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群調査概要

所 在 地	長野県南安曇郡豊科町大字田沢 上ノ山地籍
調 査 主 体	豊科町東山遺跡調査会
調 査 原 因	ゴルフ場造成
調 査 期 間	1987年5月から11月
遺 跡 の 立 地	丘陵
遺 跡 の 時 期	松本市岡田地区から東筑摩郡四賀村にかけての山中に広がる須恵器窯跡群の一角 奈良・平安時代（8世紀前半から10世紀初頭）
遺 跡 の 性 格	須恵器窯跡群へ移転したとされる信濃國府とも関連
主 な 遺 構	須恵器窯17、堅穴建物25、土師器焼成遺構25以上、粘土貯蔵施設・炭窯・土坑他
菖蒲平窯跡群	堅穴建物1、土師器焼成遺構2以上、炭窯・土坑他 (現状保存地内に須恵器窯20以上、堅穴建物・土師器焼成遺構多数)
主 な 遺 物	須 惠 器 坚A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Z 頸壺・水瓶・四耳壺・鉢・擂鉢・甕・瓶子・小壺托杯・円面鏡など 土 師 器 無台椀（杯）・有台椀・皿・耳皿・小型甕・甕・懶など 黒色土器 無台椀・有台椀・皿など 灰釉陶器 椭・皿・瓶など 瓦 丸瓦・平瓦・軒丸瓦・瓦当范 そ の 他 当て具・土鍬・鐵製品・石製品など
菖蒲平窯跡群	須 惠 器 坚A・B・C・D・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P・Q・R・S・T・U・V・W・X・Y・Z 甕など 土 師 器 無台椀・有台椀・皿・小型甕・甕・懶など 黒色土器 無台椀・有台椀・皿など 灰釉陶器 椭・皿・瓶 瓦 丸瓦・平瓦 そ の 他 鐵製品・石製品

本書の作成及び展覧会の開催にあたり、下記の方々並びに諸機関からご指導・ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

### ご協力者

池上 哲	岩崎泰史	植野浩三	岡田文男	荻原一馬	小原 総	桐原 健	小林三郎
小林康男	小松 学	酒井潤一	笹沢正史	寿福 滋	田辺昭三	戸井晴夫	戸沢充則
萩本 勝	服部敬史	林 幸彦	樋口昇一	山口 明	山下誠一	山下孝司	山田瑞穂
古田恵二	綿田弘実						

### ご協力機関

飯田市立郷考古博物館	窯跡研究会	國學院大學考古学研究室	佐久市教育委員会
塙尻市立平出博物館	信義教育会生涯学習センター	信義史学会	上越市教育委員会
豊科町東山遺跡調査会	長野県考古学会	長野市立博物館	長野県立歴史館
奈良大学考古学研究室	並崎市教育委員会	八王子市教育委員会	平安高等学校
松本市立考古博物館	明治大学考古学研究室	立正大学考古学研究室	

### 土器づくりのムラを掘る

—上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群の発掘調査—

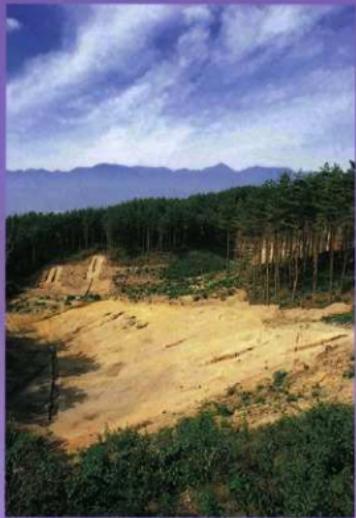
発行日：1999年7月24日

発 行：長野県南安曇郡

豊科町大字豊科4289-8

豊科町郷土博物館

印 刷：藤原印刷株式会社



上ノ山15地区から上ノ山14地区を望む